
屋上

のらり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屋上

【Nコード】

N1028L

【作者名】

のらり

【あらすじ】

高校生の工藤雅美は春日美織が嫌いだった。

高校3年になると、雅美と美織はクラスが一緒になり、雅美は美織に付きまとわれるようになる。

序章（前書き）

私自身、高校の時に嫌いな人がいました。

今となっては何で嫌いだったのかわからない。
単なるやつかみからだったのかもしれない。

そんなことをふと思いだし、書いてみました。

序章

序章

私には春日美織という友人がいたことがある。

出会いは高校の入学式。

出会いと言ってもその時はまだ名前と顔しか知らない。

クラスも違ったから。

新入生がずらりと並んだ体育館で、私は面倒ながらも少し破けた箇所のあるパイプ椅子に腰掛け、自分の名前が呼ばれるのを待っていた。

そして4組の彼女が呼ばれた時、綺麗な名前だなあと最初に感心が湧き、次にこれで名前負けしている子だったら可哀想だなあと少しの悪戯心とでも言うか、とにかくそんな感情を持って呼ばれた女の子の方を向いた。

春日さんの容姿はとても可愛らしく、はいと返事をした声は緊張しているのか上擦っていたがとても綺麗だった。

私は自分で言うのもなんだが、容姿は中の下、声は慢性の鼻炎で鼻声でしたので彼女に嫉妬心を覚えて瞬時に思う。

私はこいつが嫌いだ。

いや、嫌わねばならない。

同時に、そう思った自分を嫌悪したが、自己防衛が働いて

クラスは十もあるし、高校は三年間しかない。
関わることもないだろう。

と彼女に嫌悪した自分を脳の隅に押しやり、忘れる事にした。

暫くして、私は剣道部に入った。

その同級生が春日さんの事をよく誉めていたけど、私は愛想良く適当な相槌を打っただけだった。

次の次の春、もう彼女のことは臆気で、誰かから彼女の名前が出てきても、ああ、そんな人いたっけ、というぐらいで。

しかしクラス替えで新しいクラスになり、自分の席に着くと、なんと前の席にあの『春日美織』がいるではないか。

春日美織は此方を向いて私に話しかける。

「えっと、工藤さん、だよな？これからよろしくね」

「…ああ、うん。よろしく」

ニコリと微笑む春日美織は花が咲いたようだった。

また入学式の時の感情が甦る。

極力会話はしないでおこつ、そう私が決意した矢先に

「まーたアンタはそういう態度とる!」

「…雛」

「ごめんね美織。この子人見知りなんだわ」

同じ剣道部員の雛が突然割り込んできた。

会話を続けなければいけなくなったじゃないか、雛のバカ。

「……どうして違うクラスの雛がここに？」

「なによーう。剣道部員全員とクラスが離れちゃった人見知りの雅美を心配して来てやったんじゃない！美織、この子は根は良い子だから。仲良くしてやってね」

お母さんが。

私のツッコミは心の中で消えていった。
ついでに雛も自分のクラスへ消えていった。

「工藤さん、雛ちゃんと仲良いの？」

「え？ああ、同じ部活だし。帰り道も同じ方向だし」

「そうなんだ。あ、雅美ちゃんって呼んでも良い？」

一瞬迷ったが、何も此処で波風を立てる必要はないと思い、私はお

好きにやろうと答えた。

非常に大嫌いな奴

春日美織は席が私と前後しているからか、私によく話しかけた。

「雅美ちゃんは数学得意？」

「苦手」

「私も！じゃあ一緒にさっきの宿題考えよ？」

なんだ。

「雅美ちゃん、お昼ご飯一緒に食べようよ」

「誰と食べる約束を…」

「私も行く！」

なんだ！

彼女に対しては他のクラスメイトに比べて距離を置く対応をしてい

たはずだ。

こちらが遠ざけてもひたすら追いかけてくる。

正直、鬱陶しい。

元々嫌いな人物だし。

そんな生活が2週間ほど過ぎたある日の午後、私は屋上にいた。サボリである。

屋上のドアは鍵が掛かっているが、ドアのすぐ側にある窓から屋上までは1m程しかない。

楽勝で飛び移れるし、誰も来ない。

勿論、あの春日美織も。

絶好のサボリ場だ。

座り込んでから、安心しきってタバコに火を付けた。

メンソールの煙で肺を満たして吐き出す。

至福だ。

「あ、雅美ちゃんいた」

「！」

なんでここに春日美織がいるんだ！

「なん、で」

「雅美ちゃんの鞆があるのに、教室にいないから探しに来た！」

「……ああ、そう」

なんかもう疲れたどうでもいい。

「あ！雅美ちゃんタバコ吸ってるの？運動部じゃなかったっけ？」

「………」

あーあ。

注意されるかな、面倒くさい。

私の好きにさせてくれ。

私が黙っていると春日美織はとんでもない事を言い出した。

「…私にも一本くれ」

「………は？」

「ちょうど切らしてたんだ。貰うよ」

床に置いていた私のタバコを勝手に取り出し、火を付ける春日美織。

「銘柄一緒にラッキー」

「……………」

「驚いた？」

「……………」

「誰にも言つなよ？こじゃオシトヤカで通つてんだから」

……………。

口調も違う誰こいつ。

私は絶句した。

沈黙が続くと彼女は喋り出した。

「なあ」

「……………」

「雅美は私の事嫌いだよ」

「……………」

こじで、うん、と即答できる奴がいたら見てみたい。

「いや……そんなことは」

「隠さなくっていいって。あんなに邪険にされちゃあな」

「……………」

「沈黙は肯定ととるよ」

私は何も言えなかった。

「まあ、いや。けど、本当の私はこっちだから」

そう言ってタバコを地面に押し付けると、春日美織は去っていった。

……………どういうことだ。

今の性格が本当の春日美織？

可愛くて、声も綺麗で、大和撫子という言葉がよく似合う春日美織が？

っていうか、

二重人格じゃねえか！

私はもっと春日美織が嫌いになった。

すごく大嫌いな奴（前）

結局1日さぼってしまった。

でも部活は出ないと雛が怖いから、私は剣道場へ向かうべく歩く。道中、呼び止められた。

「雅美！」

振り向くと雛が小走りに寄ってきた。

「最近クラスでどう？美織と仲良くやれてる？」

「……………」

途端に私のテンションが下がる。

「何。どうしたの」

「…いや、何でもない」

「ふうん。…ま、美織はおしとやかで優しいし、すぐ仲良くなれるよ」

おしとやか…？
アレが？

「あ、てか雅美！タバ…」

「！」

慌てて雛の腕を引っ張って廊下を走る。

剣道場に入ると幸い誰もいなかった。

「ちょ、学校では禁句！」

「だって匂いが。雅美がタバコやめれば済む話だよ」

「あー…まだやめるつもりはない」

「もう、タバコは体力落ちるんだからね！雅美は副将なのにどうすんの！」

「大丈夫。今のところ問題ない」

はず。

「全く…。聞きやあしないんだから」

「はは、いめんね」

「はあ……」

部活は今日もキツかった。
それこそ、その時は春日美織の事なんか忘れるくらいにへトへトになつて帰った。

次の日の朝は清々しかった。
やたら爽やかな晴天。
そんな天気、私の心も晴れやかだ。

いつもの時間に登校し、いつもの時間に席に着く。
と、いつもはまだ登校していない奴が目の前にいた。
ああ、一気に大雨。

「おはよう、雅美ちゃん」

「…おはよう」

「雅美ちゃんに話があるから、ちょっと来てくれない？」

「嫌だ」

キツパリ拒否すると春日美織は私の耳元で

「タバコの事先生にチクるよ？」

と囁いた。

やっぱりもう大が付くほど嫌いだコイツ！

「で？話って何？」

連れて来られたのは屋上。

私は今、自分でも分かるくらい嫌な顔をしている。

「そんなに毛嫌いしなくてもいいだろ？雅美」

「うるさい。呼び捨てすんな」

私が吐き捨てるように言うと春日美織はクスクスと嫌な笑いを浮かべた。

「まあまあ。今日は雅美と腹を割って話し合おうと思って」

「腹を割る？」

「そ。まあ座りなよ」

春日美織が座ったので私もそれに倣った。

「何で雅美は私が嫌い？」

「表裏が激しいから」

「それは昨日分かった事だろ」

「……………」

「……………」

春日美織と二人でいると、沈黙が多い。

私が話そうとしないから当たり前前だけど。

すごく大嫌いな奴（後）

春日美織は自分の事を嫌っている人間と腹を割って話したいと言っている。

なんて奇特な奴だろうか。

でも真剣さは伝わってきた為、いつもは春日美織が破る沈黙を、今日は私が破ってみようと思った。

「どうしてそんなに私に拘る？自分を嫌っている人間になんか関わらない方が楽じゃないか。いくら席が前後だからって、他に友達がいるだろう」

「……トモダチ、ねえ」

はは、と嘲笑いながら春日美織はポケットからタバコを取り出して火を付ける。

私にも一本渡してくれたから私は黙ってそれを受け取った。

「アイツらは上辺だけだよ」

「え」

そんなはつきりと…。

春日美織は私に語り始めた。

「私さあ、中学の時はこの性格を全く隠してなかったんだわ。で、皆に近寄りがたく思われちゃって、友達なんて呼べる人は一人もいなかったんだ。最初はそれで良いと思ってた。でもクラスのはじっこから見る他の子達は楽しそうでさ。羨ましくなったんだ」

「で、高校ではその性格を隠していたわけだ」

「そ。幸い、同じ中学の奴らには進学しなかったし。でもやっぱり自分を殺しながら作った友達だろ、上辺だけの付き合いなんだよな」

「…ふうん」

何だか、意外だった。

いつも人の輪の中にいる奴だと思っていたから。

「で？私に付きまとう理由は？」

「付きまとうって…酷いよなあ」

苦笑いをする春日美織は、悲しそうだった。

私は罪悪感に苛まれた。

私が春日美織を嫌う理由は、第一印象の『万人受けしそうな可愛らしい人物』だったからだ。

私は人を外見で判断してしまったのだ。

「何ていうか、私と雅美は似てると思ったんだ」

「似てる？」

「こっちの私と」

春日美織が私に本性を見せてからまだ日が短いから、私には分からなかった。

「どこが？」

「これから分かるよ」

「ふっん」

タバコの灰がポトリと落ちた。

気付けば、もう火はフィルターに差し掛かろうとしていた。

私がタバコの火を消すと、春日美織が立ち上がる。

彼女はもうとっくに火を消していたらしい。

「もうそろそろ本鈴鳴るね。教室行こっか！雅美ちゃん」

もう彼女はいつもの教室の春日美織だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1028/>

屋上

2010年10月15日21時40分発行